

リカルドの指摘

一昨年、一年半にわたり日本に滞在し、一橋大学でマクロ経済研究を深めた、リカルド・トレス・ペレス、ハバナ大学教授が、最近雑誌『テーマス』に「キューバ経済の刷新—継続と断絶」という論文を発表しています。トレス教授は、筆者の友人でもあります。日本の皆さんの中には、講演を聞かれた方も少なくないと思います。この論文は、キューバ経済の現状を大変厳しく分析しており、現在の経済改革が必要となっている背景を明確に指摘しています。

以下、農業部門に関するところを紹介します。キューバ農業については、日本では、衝撃的な吉田太郎氏の2冊の著作、『200万都市が有機野菜で自給できるわけ—都市農業大国キューバ・レポート—』（築地書館、2002年）、『有機農業が国を変えた—小さなキューバの大きな実験—』（コモンズ、2002年）以来、有機農業への幻想的な願望によるキューバ訪問とその報告記が後を絶ちません。キューバ有機農業の教祖と自認される吉田氏は、上記2著での重要点を大幅に変えています。自らの最近のブログで、「すでにキューバが自給できていないことは、採算(ママ)このブログでも取りあげてきました。なぜ、マスコミは何度もキューバの有機農業ばかりを話題にするのでしょうか」と、ひとつひとつのように述べられています。

キューバ農業の問題点については、木を見て森を見ないことがないようにしたいものです。あるいは、我田引水、ひいきの引き倒しにならないようにしたいものです。キューバで現実の問題となっているのは、リカルドさんが指摘するように、大筋では、下記の点なのです。

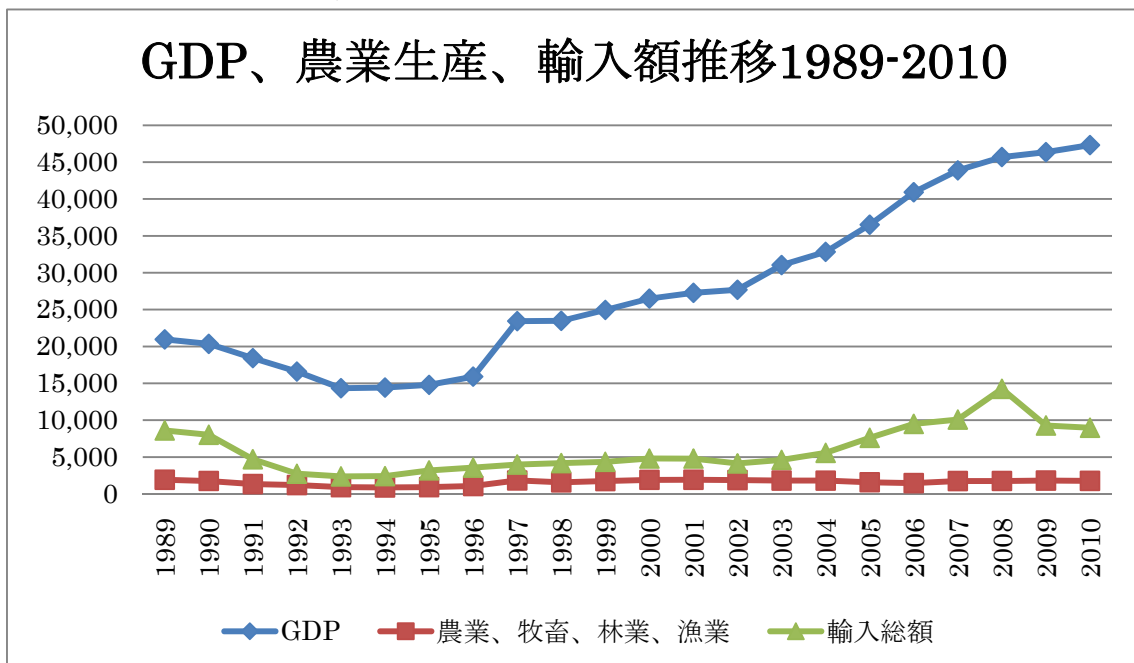
「この20年間、キューバの物理的インフラは、継続的に劣化し、多くの産業部門で生産コストを著しく上昇させ、ボトルネックとなり、特定の能力を適宜に利用できなくしている。農業の収穫期には、膨大な損失が生じている。それは、運輸、容器、加工産業能力の不足によるものである。

キューバ農業は、大部分の基本的な作物において収穫率が低く、未使用地の比率は高い。キューバの農業収穫率は、世界水準及び周辺諸国の水準と比較して低いものとみなされる。もし、農業に投じられた科学の潜在能力を考慮するならば、状況は、一層悪いものとなる。このことは、大半が国内市場向けに生産されている作物だけでなく、サトウキビやコーヒーのような輸出作物にも影響している。

他方、キューバの特徴にしたがって正しく考えられた生産奨励方式が存在しないことから、広大な土地が未使用地となっており、十分には生産に利用されていない。実際、キューバの土地のかなりの部分が利用されていない一方、食料の輸入は、家庭の消費の80%を賄っ

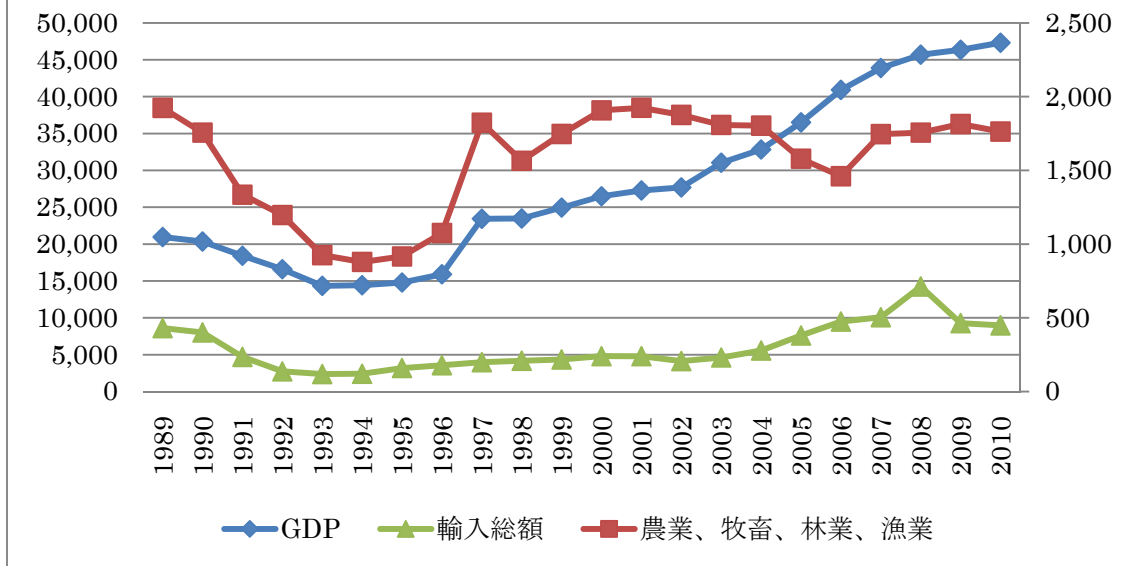
ており、年間輸入総額のおよそ4分の1を占めている。このことから、外貨収支において恒常的な緊張をもたらしているとともに、国の食料安全保障を危険に陥れている。この情景は、農村社会に破壊的な影響を与えている。というのは、基本的な生活費を満足させるのに十分な収入を得る機会をないので、農村からの人口の流出をもたらし、都市と農村の人口の格差が一層増大するからである。そのことはまた、キューバ国内の異質性を増大させているのである」。

リカルドさんの論文の理解を助けるために、筆者作成のグラフを掲載しておきます。



この表からは、「非常時」に国民の食生活を維持したのは、有機農業ではなく、輸入食料であったことがわかるでしょう。

GDP、農業生産、輸入額推移1989-2010



(2011年7月5日 新藤通弘)